1

2015.7.11 sat

「産業考古学入門」

産業考古学は「産業遺産」を対象として調査・研究し、産業活動の過程を解明・評価し、「価値」が認定された場合は保存・公開・復元・(再)利活用する方策を考察する学問分野です。私たちは、産業遺産は民族・地域社会・時代と伝統伝承の衣をまとった「文化財」であると考えています。

第1回は、このような学問研究分野が世界と日本にどのような契機から生まれてきたか(産業考古学前史)、誕生した「産業考古学」は地域／まちづくり・環境／建築／景観保全や修景とどのように関わっているのか(産業考古学の歩みと現在)、産業考古学会の意義、世界遺産との関連、今後の課題など(世界と日本の(世界遺産となった)産業遺産)について紹介します。

種田明 OITA AKIRA

講師紹介

跡見学園女子大学観光コミュニティ学部観光デザイン学科・教授

ドイツ博物館研究員、「産業技術の歴史的展開調査研究」調査委員(海外担当)、国立民族学博物館共同研究員、トヨタ産業技術記念館展示計画調査研究会委員、静岡県「文化政策推進会議」専門委員、浜松市観光ヴィジョン策定委員会委員長、(財)日本観光振興協会・社会経済生産性本部産業観光推進会議委員などを歴任。

現在、Deutsches Museum・VDI・ICOHTEC・GTG・SIAなど海外・学協会会員、産業考古学会理事(国際担当)、日本産業技術史学会理事、TICCIH日本代表・機関誌"Patrimonie de l'industrie"Comité Scientifique委員、日本イコモス国内委員など。著書には単著に『ドイツ技術史の散歩道』(同文舘出版、1993)、『近代技術と社会』(山川出版、2003)、共著に『産業革命の技術』(産業革命の世界②)(有斐閣、1981)、『現代のドイツ』第10巻(三修社、1982)、『機械と人間』(東京大学出版会、1985)、『イギリス近代史研究の諸問題』(丸善、1985)、『日本の産業遺産 産業考古学研究』Ⅰ(玉川大学出版部、1986/2000)／Ⅱ(玉川大学出版部、2000)、『近畿の産業博物館』(阿吽社、1990)、『社会経済史学の課題と展望』(社会経済史学会創立60周年記念、有斐閣、1992)、『都市と文明』(ミネルヴァ書房、1996)、『[通史]日本の科学技術』第5巻2(学陽書房、1999)、『ツーリズム成長論』(慶應義塾大学出版会、2013)、編共著に『産業遺産を歩こう』(東洋経済新報社、2009)、翻訳書には監訳に『原色図録 金の世界』(監修・木村尚三郎)(東洋経済新報社、1984)、共訳に『フランス百科全書絵引』(監修・解説J・ブルースト)(平凡社、1985)などがある。

2

2015.9.19 sat

「世界遺産と産業遺産」

みなさんご存知のように今年の7月、「明治日本の産業革命遺産」が世界遺産に登録されました。わが国で産業遺産の世界遺産登録は、石見銀山についで3番目になります。産業遺産は、文化財の中では新人に属します。産業遺産が文化財の仲間入りをしたのは、たかだかここ20年ぐらい前のことです。実は、世界遺産の中でも産業遺産は新人です。わが国で世界遺産がフィーバーしたのは、1990(平成2)年に入ってからのことですが、世界遺産自体は、それより20年前に条約が締結されており、40年以上の歴史があります。なのになぜ産業遺産は新人なのでしょうか。講演会では、この辺の謎解きをしながら、次のような項目でお話しようと思います。

1. 世界遺産の成立とわが国の状況　　2. わが国の条約批准と近代化遺産
3. わが国の文化財概念の変遷と産業遺産　　4. Global Strategyと産業遺産

伊東孝 ITOH TAKASHI

講師紹介

日本大学上席研究員・産業考古学会会長

上岡弘和氏撮影

日本大学上席研究員。伊東孝都市環境計画研究室、日本大学理工学部教授、土木学会土木史研究委員会委員長、文化庁文化財保護審議会専門委員などを歴任。

現在、内閣府「稼働資産を含む産業遺産に関する有識者会議」委員、日本ICOMOS「技術遺産小委員会」主査、国指定重要文化財橋梁(永代・清洲・勝間橋)の長寿命化検討委員会」委員長、隅田川中流部著名橋色彩検討委員会委員長、錦帯橋世界文化遺産専門委員会委員、佐波市建造物保存活用に関する専門家会議委員、埼玉・富山県の文化財保護審議会委員、東京都江戸東京博物館運営委員会委員、「勝間橋をあげる会」代表、産業考古学会会長など。

著書には単著に「東京の橋ー水辺の都市景観」(鹿島出版会、1986)、「東京再発見ー土木遺産は語る」(岩波新書、1993)、『水の都、橋の都ーモダニズム東京・大阪の橋梁写真集』(東京堂出版、1994)、『日本の近代化遺産ー新しい文化財と地域の活性化』(岩波新書、2000)など、共著には『四谷見付橋物語』(技報堂出版、1988)、『ダムをつくるー黒四・佐久間・御母衣・丸山』(日本経済評論社、1991年)、『水の東京』(岩波書店、1993)、『近代とは何か』(東京大学出版会、2005)、『鉄道遺構ー再発見』(LIXIL出版、2015)などがある。

3

2015.11.7 sat

「石見銀山遺跡とその文化的景観」

産業遺産の面白さは、現地の遺構から、そこで働いた人たちが、いかに知恵を絞り、努力したのかを知ることにあります。遺産に留められた数々の痕跡は、先人たちの努力を知るかけがえのない資料といえるでしょう。2007(平成19)年に世界遺産に登録された石見銀山でも、銀山最盛期における備中早島生まれの山師、安原伝兵衛や、明治期の藤田伝三郎による藤田組の技術者たちなど、多くの創意工夫の跡が残されています。実はそこには、これら貴重な文化財を後世に残そうと努力した人々もありました。

石見銀山での知恵と努力が、その後どのような広がりをみせ、ひいては現在の我々にどのように関連しているのかを読み解き、産業遺産の奥深さを探っていきます。

中田健一 NAKADA KENICHI

講師紹介

大田市教育委員会石見銀山課課長補佐

広島県埋蔵文化財調査センター、島根県邑智郡石見町教育委員会を経て、1995年から大田市教育委員会。以後、石見銀山遺跡の発掘調査を主体とした遺跡の総合調査に従事し、調査報告書の執筆刊行から、世界遺産登録推薦書の作成、包括的保存管理計画の策定など登録への諸準備にあたった。登録後は、日本で初めてとなる世界遺産の範囲拡大(2010年)に取組み、現在は、遺跡の調査と保存活用、遺産価値の情報発信に日々携わる。国際記念物遺跡会議(ICOMOS)会員、国際産業遺産保存委員会(THICCH)会員、日本考古学協会会員、産業考古学会評議員。

『論集 石見銀山』(有斐閣、2002)、『別冊太陽 石見銀山』(平凡社、2007)『日本の金銀山遺跡』(高志書院、2013)、『週刊 日本の世界遺産 石見銀山』(朝日新聞出版、2012)などへの執筆のほか、「島根県石見銀山遺跡の使用石材」「関西近世考古学研究13」(関西近世考古学研究会、2005)、「島根石見銀山に伝播した茶の湯」「関西近世考古学研究14」(関西近世考古学研究会、2006)、「石見銀山遺跡とその文化的景観の世界遺産登録」「明日への文化財」(文化財保存全国協議会、2009)、「石見銀山遺跡とその文化的景観の保全」「遺跡内外の環境と景観」(奈良文化財研究所、2010)などの研究発表がある。

4

2016.1.23 sat

「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産登録と日本の蚕糸業

2014年6月、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界文化遺産に登録されました。その前後から、同製糸場を訪れる人は急増し、蚕糸絹遺産・文化が脚光を浴び、各地に養蚕・製糸の体験工房が新設されたり、それに関連した話題も増えてきました。しかし、富岡製糸場が操業を停止した昭和末期以降、急速に縮小した日本の在来型の製糸工場は復活することなく、その原料となる繭は慢性的に不足しています。この講演では、戦後の高度経済成長期前半まで日本の産業の中枢だった蚕糸業の盛衰と現役の製糸工場などを、概観していきます。あわせて、講演者が現地で聞き取りやアンケート調査を行った富岡製糸場来場者の動向や蚕糸絹文化に対する認識について、報告します。

大島登志彦 OSHIMA TOSHIHIKO

講師紹介

高崎経済大学経済学部経営学科教授・産業考古学会理事

高崎市史編さん調査委員、群馬県交通政策連絡会議「豊かな交通部会」部会長、群馬県地域公共交通に関する有識者会議委員などを歴任。

現在、安中市地域公共交通会議会長、群馬県タクシー準特定地域協議会会長、前橋市公共交通マスタープラン策定協議会副会長、群馬県立歴史博物館 展示製作にかかる外部検討委員会委員、日本地理学会会員、人文地理学会会員、日本交通学会会員、交通史学会会員、産業考古学会理事。

著書には単著に『群馬県における路線バスの変遷と地域社会』(上毛新聞社、2002)、『群馬・路線バスの歴史と諸問題の研究』(上毛新聞社、2009)、共著に「両毛を結んでー前橋駅100年の歩みー」(上毛新聞社、1989)、『上越線の80年』(郷土出版社、1997)、「車王国群馬の公共交通とまちづくり」(日本経済評論社、2001)、『群馬・産業遺産の諸相』(日本経済評論社、2009)、『新高崎市の諸相と地域的課題』(日本経済評論社、2012)、『群馬の再発見 地域文化とそれを支えた産業・人と思想』(上毛新聞社、2012)がある。

5

2016.3.12 sat

「明治日本の産業革命遺産、製鉄・製鋼、造船、石炭産業」

2015(平成27)年7月にUNESCO世界文化遺産の仲間入りを果たした「明治日本の産業革命遺産 ―製鉄・製鋼、造船、石炭産業―」。基調講演では、全国8県11市に点在する23件の構成資産をシリアルノミネーションに基づいたストーリーで繋げた試みをはじめ、なぜ近代に造られた産業遺産にスポットが当てられ、今回の登録に結びついたのか。とりわけ講師が登録に際し一部関わった製鉄ストーリーについて、製鉄・製鋼と分けられていることの意味と八幡製鐵所が日本の産業革命に貢献をしてきた役割について、世界遺産に必要なUUV(類い稀なる普遍的価値)を見据えつつ、短期間に日本が歩んできた積極的な技術導入と独自の近代化にまつわる各種の遺産群について、わかりやすく紹介・解説します。

シンポジウム「近代化遺産の文化的価値と保存・活用」
コーディネーター 伊東孝氏
パネリスト 種田明氏／中田健一氏／大島登志彦氏／市原猛志氏

第1回から第5回の講演者が一堂に会すシンポジウムです。日本の近代産業を支えてきた遺産はどういう価値を持つのか、海外の遺産との違いは何なのか、それらをどう残し未来に伝えていくべきなのか、などについて意見を闘わせます。

市原猛志 ICHIHARA TAKESHI

基調講演講師紹介

九州大学百年史編集室助教・北九州市門司麦酒煉瓦館館長・産業考古学会理事

九州地域産業活性化センター「遊学アイランド九州形成に向けた産業支援方策」委員、おりお未来21協議会歴史的建造物部会専門家委員、「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」情報発信業務企画提案評価委員会委員、日本建築学会近現代建築資料全国調査特別ワーキンググループ九州・沖縄地区幹事、九州大学箱崎キャンパスにおける近代建築物の評価報告書に基づく取り扱い検討委員会委員などを歴任。

現在、日本建築学会、日本機械学会、文化資源学会等学協会会員、福岡県近代化産業遺産行動指針指導委員、中間市文化財専門委員、中間市文化遺産活性化実行委員会副委員長、奈良少年刑務所を宝に思う会発起人、NPO法人北九州COSMOSクラブ理事、NPO法人J-heritage理事、九州伝承遺産ネットワーク理事、産業考古学会理事(Web担当)、など。北九州市産業観光パンフレットなども監修。

著書には単著に『北九州技術革新史(全体編)』(北九州産業技術保存継承センター、2011)、共著に『産業遺産を歩こう』(東洋経済新報社、2009)、『日本炭鉱都市』(邦題・ライフ出版社(韓国)、2013)、編共著に『北九州の近代化遺産』(弦書房、2006)、『福岡の近代化遺産』(弦書房、2008)、『筑後の近代化遺産』(弦書房、2011)などがある。

三池炭鉱万田坑

1 横浜赤レンガ倉庫　2 三井田川鉱業所　3 開智学校　4 高島炭鉱端島坑　5 信越旧線碓氷第3拱橋　6 門司港駅　7 別子銅山東平貯鉱庫